

公開実用平成 3-66338

引付
Citation 3

⑩日本国特許庁(JP)

⑪実用新案出願公開

⑫公開実用新案公報(U) 平3-66338

⑬Int.Cl.³E 04 F 13/08
13/14識別記号 M 7023-2E
101 H 7023-2E
102 E 7023-2E

⑭公開 平成3年(1991)6月27日

審査請求 未請求 請求項の数 1 (全頁)

⑮考案の名称 下見板

⑯実願 平1-128748

⑰出願 平1(1989)11月1日

⑮考案者 龟澤 清武 東京都中央区日本橋室町2丁目5番13号 三井第五別館東レグラサル株式会社内

⑯考案者 東久世 道昭 滋賀県大津市園山1丁目1番1号 東レグラサル株式会社
建材開発研究所内

⑰出願人 東レグラサル株式会社 東京都中央区日本橋室町2丁目5番13号 三井第五別館

⑯代理人 弁理士 中尾 充

明細書

1. 考案の名称

下見板

2. 実用新案登録請求の範囲

複数枚が羽重ねに基材に取付けられる下見板であって、凸形状の上縁面と、下縁近房の裏面に横方向に設けられ、かつ下側の面が凹形状である支持脚とを有し、かつ、基材に取り付けられるに際して、上下に隣合う下見板の上記上縁面と、上記支持脚の下側の面とが互いに嵌め合いに係合される形状に、左右に隣り合う下見板が、縦方向の縁面で合じやくりで重ね合わされる形状に形成されるとともに、上縁近房の羽重ねの基材側に位置する部分で、基材に固定されることを特徴とする下見板。

3. 考案の詳細な説明

(産業の利用分野)

本発明は、建築物の壁面に使用する、主としてセラミック系の素材で作られた、下見板に関するものである。

(従来の技術)

従来、建築物の壁面を仕上げる下見板張りには、押縁下見板張り、よろい下見板張りや、箱目地下見板張りなどがあり、古くから実用性と外観を兼ね備え、これらの工法に適した多くの下見板が提供されていた。

一方、陶器や磁器などのセラミックは、建材にとって、耐久性と外観の点で優れた素材であって、これも古くからタイルとして外装用、内装用を問わず広く建築物の表面に利用されてきた。しかし、従来、大きな製品の製作が困難であったために、下見板として利用されることとはまれであった。

(考案が解決しようとする課題)

最近、の製作技術が大きく進歩し、これを素材とする大形製品の製作が可能になった。しかし、セラミックは、前述の優れた特徴を有するものの、製作後の加工が難しく、とくに外装用に用いる場合、予め、雨漏れを防ぐ構造と、施工性を配慮して形状を決め、製作しておかないと、実際に使用することは難しい。

本考案は、主にセラミックを素材とする下見板に関し、美しい外観や、雨水の侵入防止などの機能を損なうことなく、施工性にも優れた下見板の開発を行った結果完成したものである。

(課題を解決するための手段)

上記の目的を達成するために、本考案においては、複数枚が羽重ねに基材に取付けられる下見板であって、凸形状の上縁面と、下縁近房の裏面に横方向に設けられ、かつ下側の面が凹形状である支持脚とを有し、かつ、基材に取り付けられるに際して、上下に隣合う下見板の上記上縁面と、上記支持脚の下側の面とが互いに嵌め合いに係合される形状に、左右に隣り合う下見板が、縦方向の縁面で合じゅくりで重ね合わされる形状に形成されるとともに、上縁近房の羽重ねの基材側に位置する部分で、基材に固定されることを特徴とする下見板を提供するのである。

ここに下見板の上下、縦横、左右、表裏は、下見板が基材に取り付けられた状態でのそれぞれの位置、もしくは方向を意味する。また、基材とは、

欄縁、柱などの下見板を主体構造に取り付けるために下見板を固定する部材、上縁面とは、下見板が取り付けられた状態で上方に対する面、支持脚とは、下見板の下部の裏側（基材側）に横方向に設けられ、下見板と基材との間のスペーサとなる凸状帯のことを行う。

（実施態様）

以下、本発明を実施態様の例をあげ、分かりやすくするために、その取り付けられた状態を図面に示して、これを参照しつつ、さらに詳しく説明するが、本発明に係る下見板は、この実施態様に限られるものではない。

第1図は、本発明の実施態様の一例である下見板1の正面図である。

第2図は、第1図に示された下見板1が、基材2に取り付けられた状態の断面図（A-A'）である。

第3図は、第1図に示された下見板1が、基材2に取り付けられた状態の左側面図である。

第4図は、本考案にかかる下見板の実施態様の

他の一例の下見板 1' が、基材 2 に取付けられた状態の左側面を示す参考図であって、上記の例の第 3 図に相当する。

本考案に係る下見板は、通常、複数枚を千鳥、または並列に配列し、羽重ねにされて、取付けられる。

第 1 図、および第 3 図に示されるように、下見板 1 の上縁近房の羽重ね部分の基材 2 側に位置する部分 3 には、予め孔 4 が開けられている。下見板 1 は、孔 4 を通して、木ネジや釘などの止め金具 5 を用い、基材 2 に固定される。次に、下見板 1 の上縁面 6 は、凸形状に、下縁近房の裏面側 7 に、横方向に設けられた支持脚 8 の下側の面 9 は、凹形状に形成され、かつ、上下に隣合う下見板の上記凸形状と、凹形状の部分とが、互いに嵌め合いで係合されるように形成されている。一方、第 2 図に示されるように、縦方向の縁面 10 は、合じっくりに形成されている。

また、上下の下見板が羽重ねになって、互いに接触する面の、少なくともいずれか一方の下見板

の面と、左右の下見板が合じやくりに重なりあって、互いに接触する面の、少なくともいずれか一方の下見板の面とに、縁に平行にライン溝11を設けることが好ましい。すなわち、下見板の周縁部の、隣合う下見板と接触する面に、ライン溝11を囲らすのである。このライン溝11は、必ずしも全周に囲らす必要はない。本実施態様では、相接触する双方の下見板の面にライン溝11が形成されている例を示した。

具体的な取り付けに際しては、上縁面6は、一段上の下見板12の支持脚の下側の面に嵌め合いに係合され、支持脚8の下側の面9は、一段下の下見板13の上縁面に嵌め合いに係合される。この嵌め合いは、機械の嵌め合いのような厳密なものでなくとも十分である。横方向は、左右に隣り合う下見板14と合じやくりで重ねられるように取付けられる。

(考案の効果)

本考案にかかる下見板にあっては、下見板の取付部分が、羽重ねの基材側に位置するために、表



面に現れることもなく、外観を損ねたり、その部分から雨洩れするおそれもない。上下の接続部は、その上縁部と下縁部が互いに羽重ねにされ、漏水が防止される。左右の接続部は、合じゃくりで重ねられているので、雨水が直接内部に侵入することはない。継ぎ目に沿って流れる水は、下端部で次の下見板の表面側に導かれ、裏面には流れ込まない。また、雨水などが毛管現象で奥へ侵入する恐れのある場合には、周縁部に上述のライン溝を設ければ、その侵入は遮断され、防水される。また、条件によっては、シーリング材を使用することも可能である。

4. 図面の簡単な説明

第1図は、本考案の実施態様の一例である下見板の正面図である。

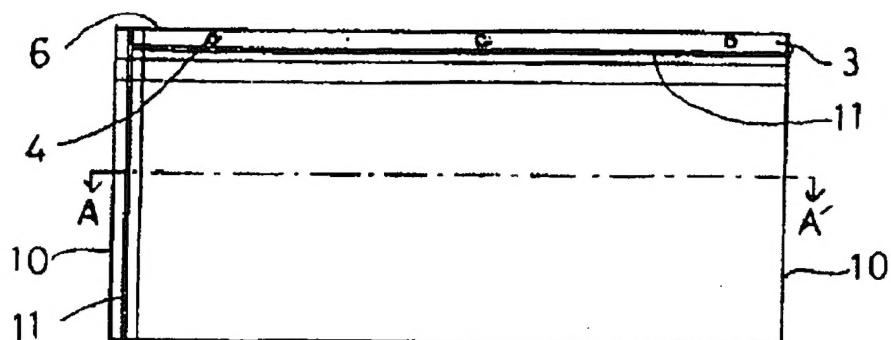
第2図は、第1図に示されている下見板1が、基材2に取付けられた状態の断面図(A-A')である。

第3図は、第1図に示されている下見板1が、基材2に取付けられた状態の左側面図である。

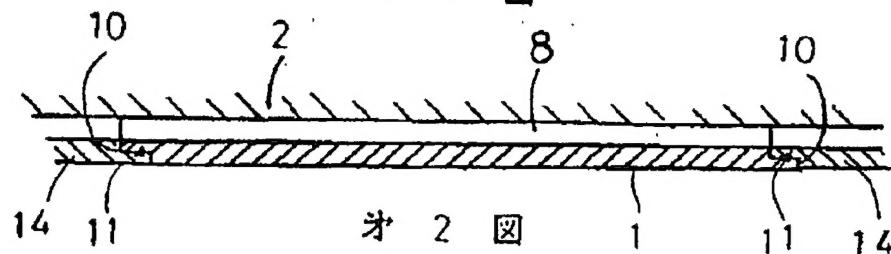
第4図は、本考案にかかる下見板の実施態様の
他の一例の下見板1'が、基材2に取付けられた
状態の左側面を示す参考図であって、上記の例の
第3図に相当する。

- 1, 1' : 下見板 2 : 基材
3 : 羽重ね部分の基材側に位置する部分
4 : 孔 5 : 止め金具
6 : 上縁面 7 : 下見板の裏面側
8 : 支持脚 9 : 支持脚の下側の面
10 : 縦方向の縁面 11 : ライン溝
12 : 一段上の下見板 13 : 一段下の下見板
14 : 左右に隣合う下見板

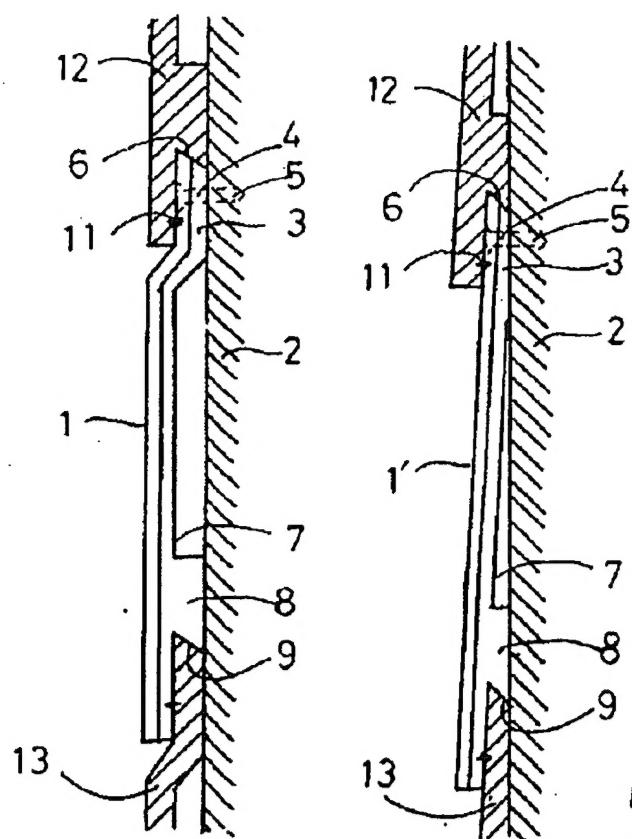
出願人 東レグラサル株式会社
代理人 弁理士 中尾充



オ 1 図



オ 2 図



オ 3 図

オ 4 図

466

出願人 東レグラサル株式会社

代理人 弁理士 中尾 充

実用3-66338

公開実用平成 3-66338

手続補正書

平成2年11月2日

特許庁長官 殿



1. 事件の表示

平成1年 実用新案登録願 第128748号

2. 考案の名称

下見板

3. 補正をする者

事件との関係 実用新案登録出願人

住所 東京都中央区日本橋室町2丁目5番13号

三井第五別館

名称 東レグラサル株式会社

代表取締役社長 志賀 宏

4. 代理人

郵便番号 550

住所 大阪府大阪市西区江戸堀1丁目23番26号

西八千代ビル 中尾特許事務所内

電話 (06) 449-1855

氏名 弁理士(9050) 中尾 充



5. 補正命令の日付

自発



6. 補正の対象

明細書の考案の詳細な説明の欄

7. 補正の内容

明細書第2頁14行目「最近、」の次に「セラミック」を挿入する。

方
式
審
査



467

実用3-66338